かわむきちかざわ 川向近沢遺跡(範囲確認調査)

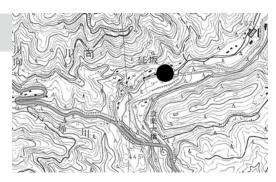
所 在 地 設楽町大字川向字近沢、馬道地内 (北緯35度6分51秒 東経137度34分7秒)

調査理由 設楽ダム

調 査 期 間 平成28年8月~10月

調査面積 500㎡

担 当 者 酒井俊彦・鈴木恵介



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過

調査は、国土交通省による設楽ダム建設事業関連埋蔵文化財範囲確認調査として、愛知 県教育委員会を通じた委託を受けて平成28年8月から10月にかけて実施した。

立地と環境

川向近沢遺跡は、豊川の支流の一つである境川の北岸丘陵部に位置する。境川が北東から南西に流下する部分に面し、南に向いた丘陵の裾から中腹付近が調査対象地である。西は境橋沢を挟んで上ヲロウ・下ヲロウ遺跡と接し、東は境川に削られた崖となっている。調査対象地の現況は、段状に造成された耕作地跡と宅地跡で、標高は最も高い所で424m、低い所では388mである。

調査の概要

調査は1m×2mのトレンチを基本とし、83か所を設定して調査を行った。その結果、調査範囲全域にわたって大規模に旧地形が改変されていることが判明した。旧地形は、南北方向では南側の境川にむかって下る地形で現況に大きな違いは無いが、東西方向では東側が高く、西の境橋沢に向かって下る地形となっている。

調査区東端部のTT30、TT29、TT40、TT51が南北に連なる部分は尾根状となっており、 耕作土のすぐ下に風化岩や基盤層が検出される。これより西は基盤層の標高が急激に下がり、TT25とTT48、TT58を結ぶ付近は旧表土と考えられる黒色土の堆積も厚くなっている。さらに西は境橋沢による土石流が下層に堆積し、上層は沢の整備と宅地造成により厚く埋め立てられている。宅地跡のTT12ではトレンチ内の全域が埋立土により造成されており、トレンチ東半部の一部では旧表土と考えられる黒色土を確認したが、トレンチ西半部ではこの層の標高が下がっているために確認できていない。

調査範囲最上部のTT1からTT8にかけての山林内は、黒色土等の包含層の可能性がある 層は見られず、腐植土等による表土の下は土石流による基盤層であった。

調査範囲最下位のTT66以降のトレンチを設けた県道小松田口線より南側では、基盤層の多くは河川堆積による砂礫であり、遺物包含層と考えられる層は検出できなかった。隣接する上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査ではこれらのトレンチと同標高付近で縄文土器を包含した層も検出されているが、当調査範囲では層序の検討から水田としての造成時に削平されて残存していないと考えられる。

遺物はTT12では土師器と染付、擂鉢(近世以降)、TT25では土師質の土器破片、TT34では石棒か石刀の可能性のある石製品、TT36では土器破片(縄文)と安山岩の剥片、TT39では土師器破片と擂鉢(近世以降)、TT47では中世陶器の片口鉢(鎌倉~室町)、TT48では安山岩系石材の剥片、TT50では土師質鍋と石材剥片がみられた。いずれも表面に近い層や再堆積層からの出土であり、造成以前の旧表土より下位からの出土は見られない。

(鈴木恵介)



川向近沢遺跡 調査範囲 (S=1/2,000)

